

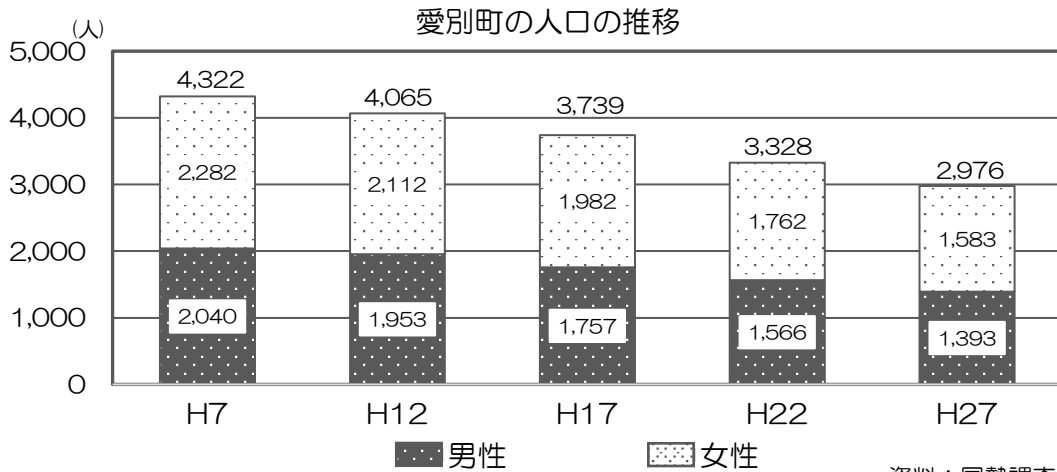


愛別町の現状

1 人口動態等

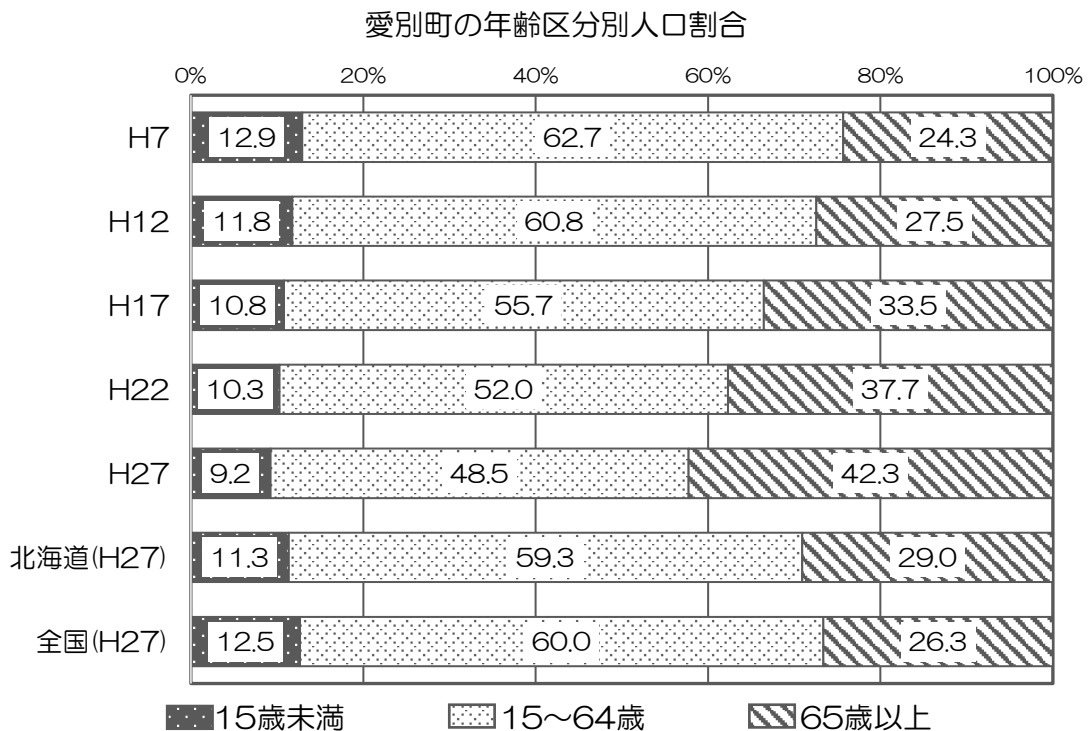
(1) 人口

少子高齢化により全国的にも人口が減少していますが、本町も同様に減少しています。



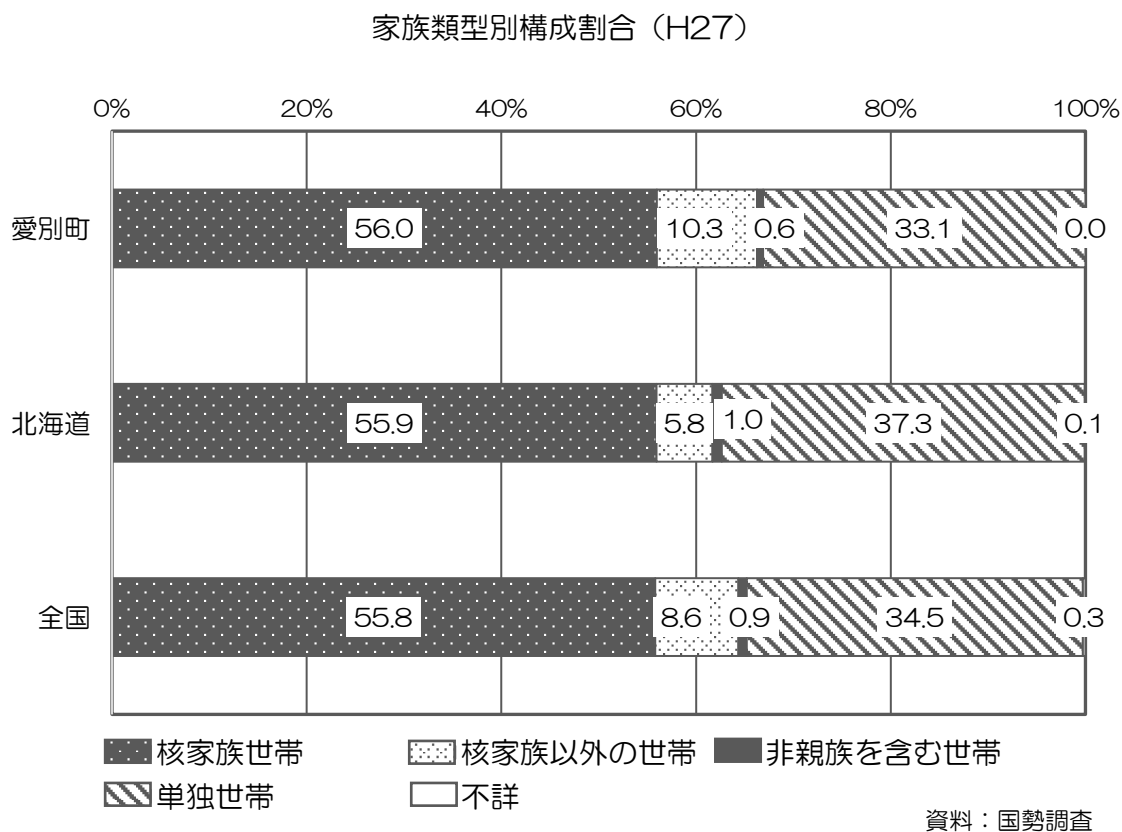
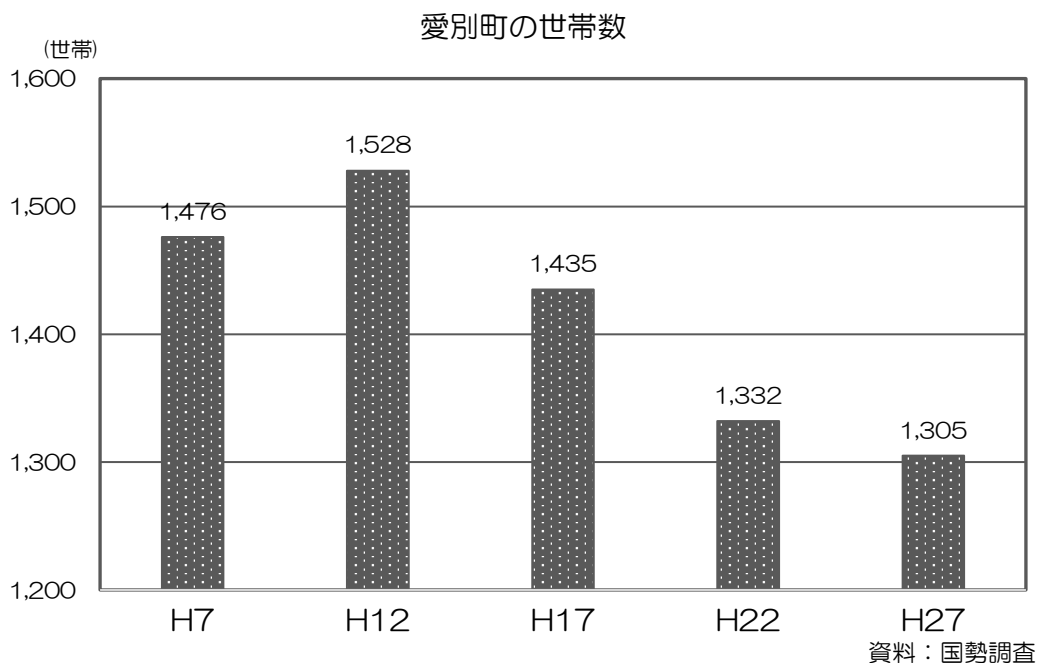
(2) 年齢区分別人口

65歳以上の占める割合は年々増加しており、高齢化が進んでいます。全国・北海道と比較しても、高齢化率は高いです。



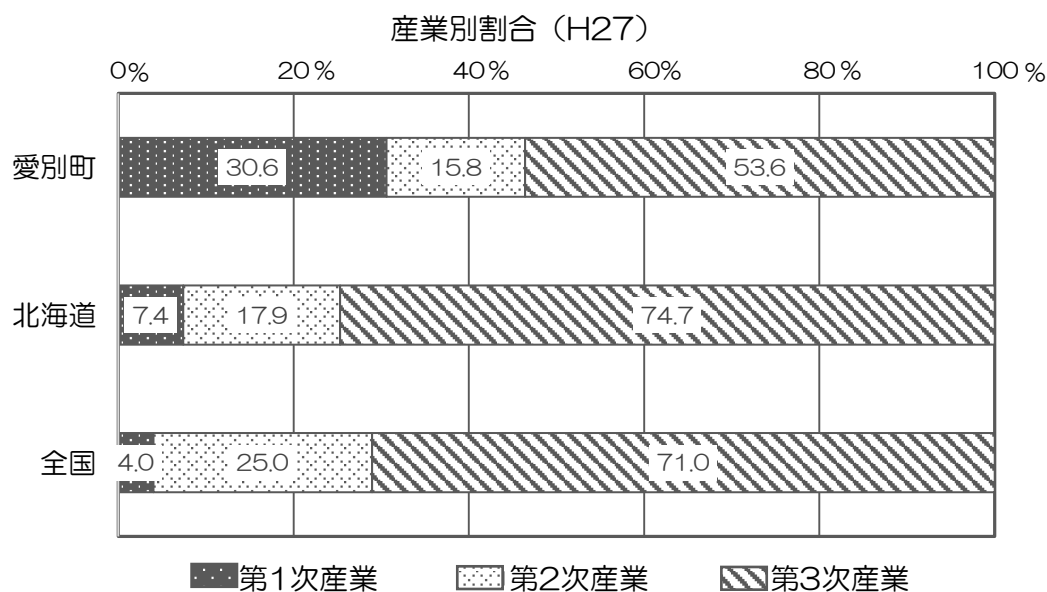
(3) 世帯

世帯数は年々減少傾向にあります。また、家族類型別構成割合については、いずれも全国と同程度の割合であり、同居人のいる核家族が約半数となっています。



(4) 産業

産業別割合は、全国・北海道と比較して農業などの第1次産業の割合が高く、第3次産業の割合が低くなっています。



資料：国勢調査

(5) SMR

SMRとは、過去10年間における死亡率を、全国を基準(100)とした場合の比較を表した数値です。本町では、全国・北海道と比べ脳血管疾患・虚血性心疾患・交通事故・不慮の事故による死亡が多い状況となっています。また、がんの部位別に死亡比をみると、胃がん・膵臓がん・乳がんが全国・北海道より高くなっています。自殺は、北海道・上川管内と同程度ですが、全国よりも高い状況です。

疾患別 SMR (H18~27)

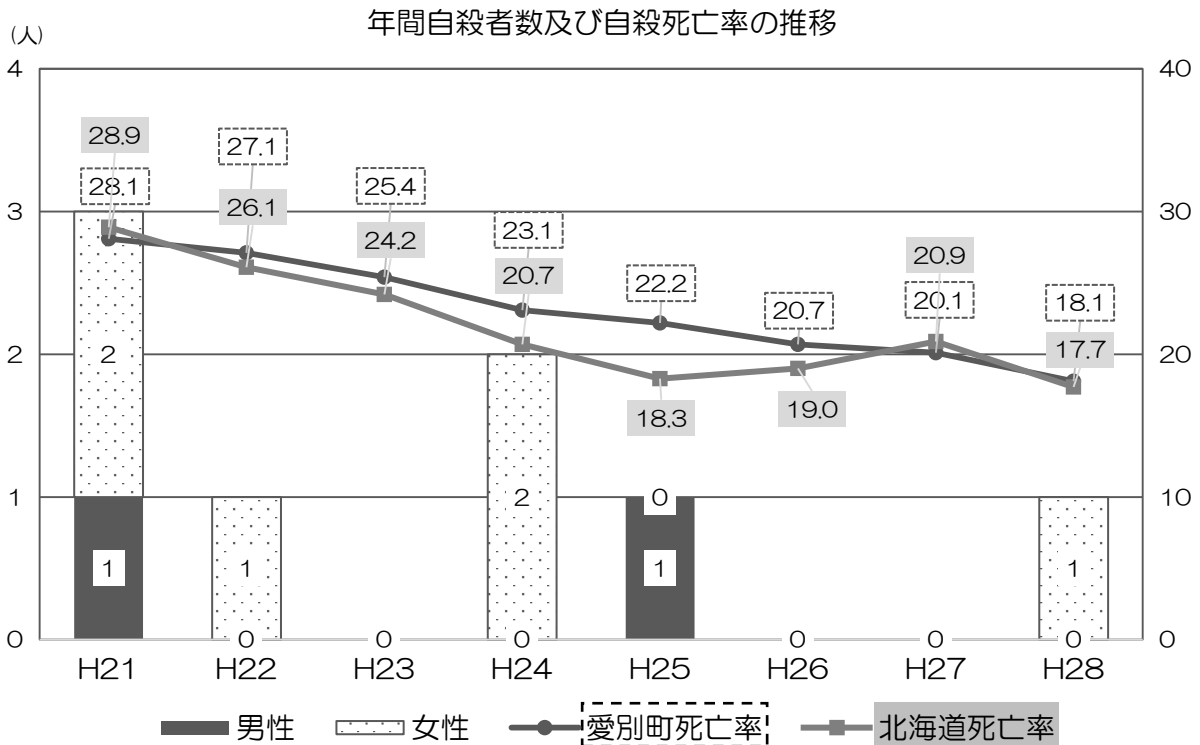
	愛別町	北海道	上川管内		愛別町	北海道	上川管内
悪性新生物	100.3	107.6	100.2	食道がん	68	110.6	105.2
脳血管疾患	117.6	91.6	95.4	胃がん	105.1	94.8	89.3
心疾患	98.3	101.6	91.4	大腸がん	71.8	107.3	99.5
虚血性心疾患	140.6	84.5	121.1	肝臓がん	78.72	89.36	85.3
腎不全	110.7	129.5	123.8	胆嚢がん	93	111.8	119.1
肺炎	58.9	95.4	99	膵臓がん	134.1	125.5	120.4
慢性閉塞性肺疾患	67.4	90.2	84.3	肺がん	112.5	118.2	110
交通事故	179.4	98.5	154.3	乳がん	215.7	107.8	79.7
不慮の事故	137.1	80.8	87.5	子宮がん	48.3	101.6	78.3
自殺	108.2	107.7	108.3				
老衰	73.7	66.2	78.6				

資料：北海道健康づくり財団

2 統計データからみる自殺の現状

(1) 年間自殺者数は平均1人で女性が多い、自殺死亡率は北海道よりも高い

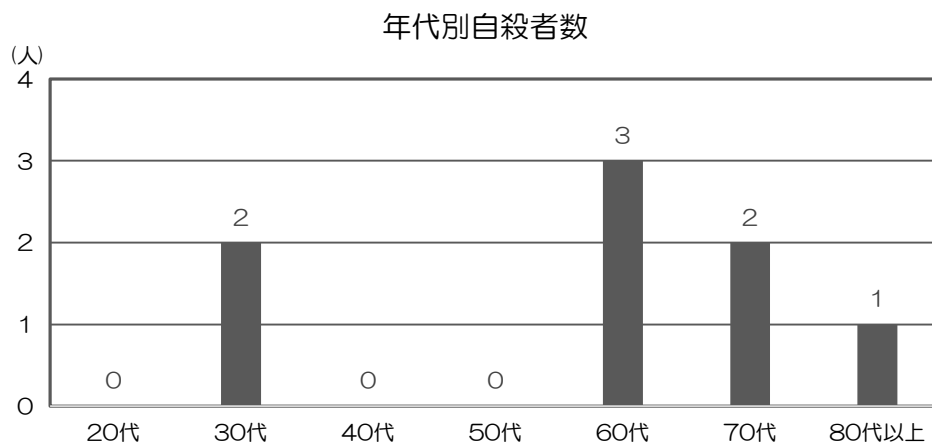
平成 21～28 年の間に自殺で亡くなった人の数は8人（年間平均1人）です。自殺死亡率は減少傾向にありますますが、8年間の平均は 23.1 と、北海道の平均 22.0 よりも高い状況となっています。



資料：厚生労働省 地域における自殺の基礎資料

(2) 若年者や高齢者の自殺者が多い

平成 21～28 年の間に自殺で亡くなった人を年代別に見ると、30代の若年層が2人、60代以上が6人です。



資料：厚生労働省 地域における自殺の基礎資料

(3) 自殺者の2人に1人が無職者

自殺総合対策推進センターが作成した本町の「地域自殺実態プロファイル」によると、有職者・無職者の自殺の内訳については、平成24～28年の間に自殺で亡くなった4人うち、2人が無職でした。また、有職者については、2人とも被雇用者（勤め人）でした。

(4) 自殺者全員に同居人がいた

本町の「地域自殺実態プロファイル」によると、自殺者の同居人の有無については、平成24～28年に自殺で亡くなった4人全員に同居人がいたことがわかりました。

3 アンケート調査結果からみる現状

(1) アンケート調査の実施

町内在住の満19歳以上の町民を対象に、こころの健康に関する考え方などを聞き、総合的にこころの健康づくりを推進するための基礎資料として、「こころの健康に関するアンケート調査」を実施しました。平成30年4月実施の検診申込書にセットし、各区長を通じて、アンケートの配布及び回収を行いました。

「こころの健康に関するアンケート調査」

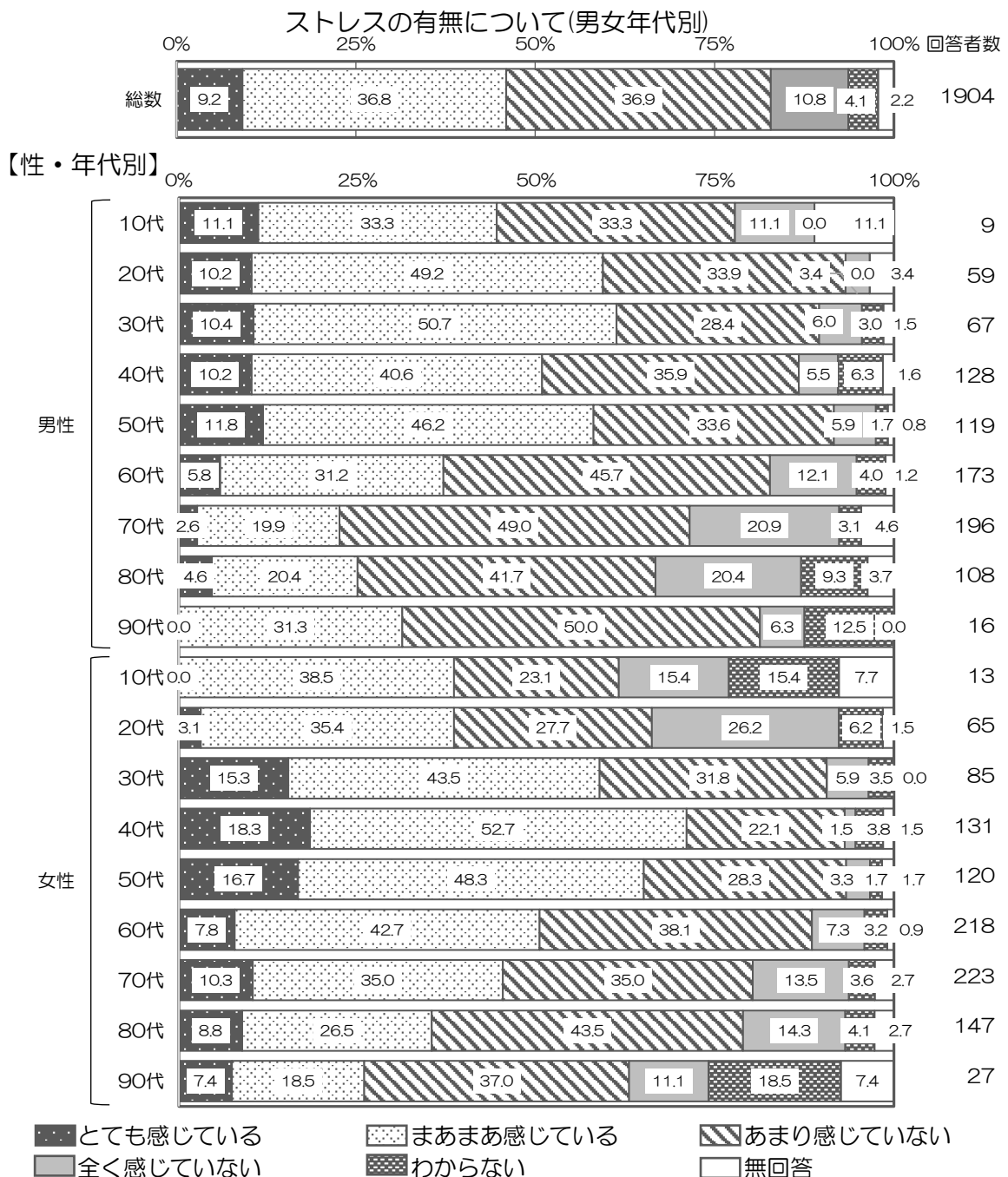
配布数	有効回答数	有効回答率
2,408通	1,946通	80.8%

(2) アンケート調査結果

① 2人に1人がストレスを感じている

「あなたは今、ストレスを感じていますか」という質問に対して、「とても感じている」「まあまあ感じている」と回答した人が合わせて46%と、およそ2人に1人がストレスを感じている状況にあります。

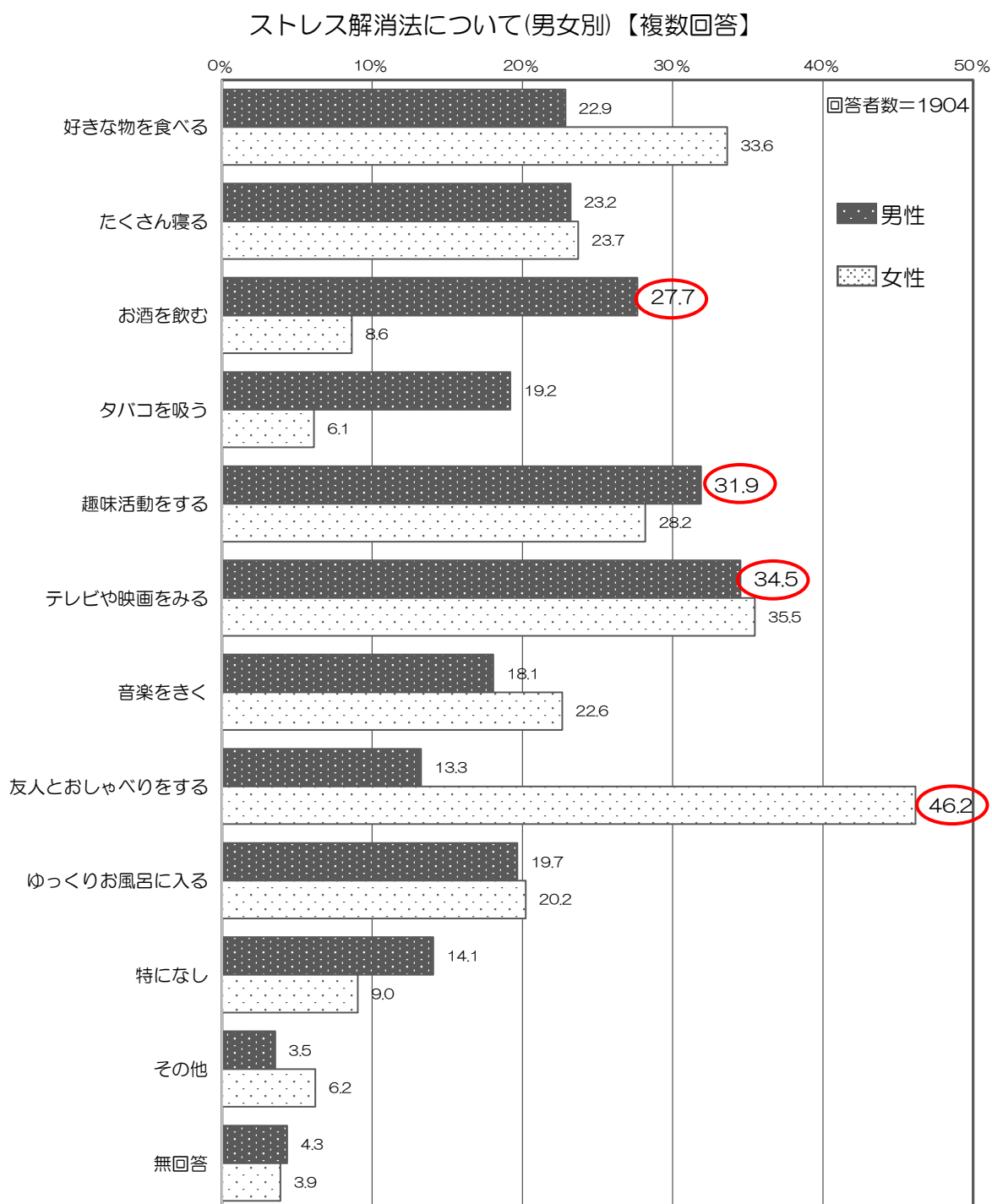
性・年代別にみると、「とても感じている」「まあまあ感じている」と回答した人の割合は、男性では20代から50代の勤労者世代、女性では30代から60代で高くなっています。



② 女性の2人に1人が友人とのおしゃべりでストレスを解消している

「あなたのストレス解消法は何ですか」という質問に対して、男性では「お酒を飲む」「趣味活動をする」「テレビや映画をみる」が、それぞれ約30%となっています。

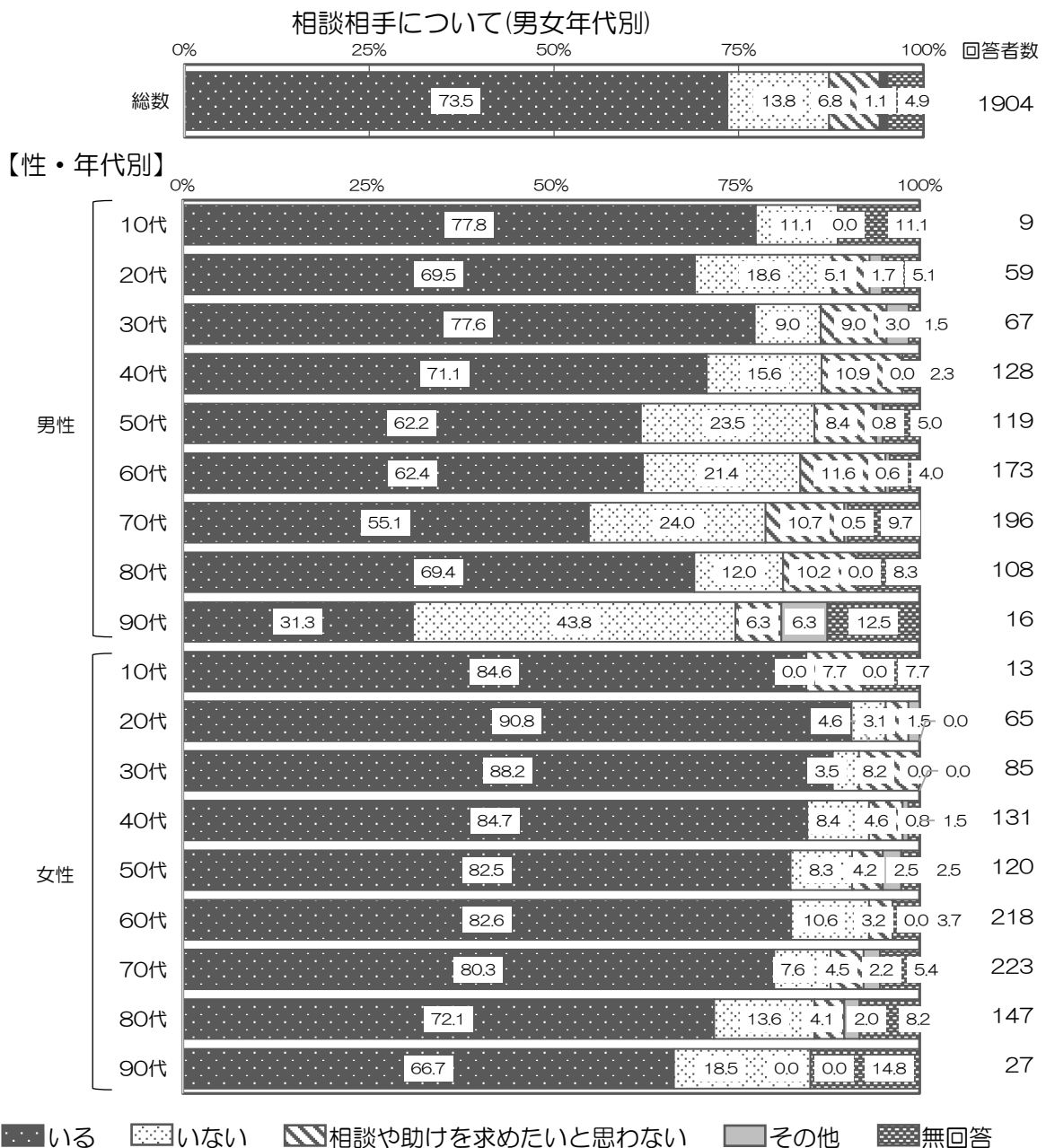
女性では「友人とおしゃべりする」の割合が46.2%と最も高くなっています。



③ 5人に1人が相談相手がいない。男性は女性に比べ、相談相手がいない、相談を求めない傾向にある。

「あなたは悩みや不安を抱えた時やストレスを感じた時、相談したり助けを求めたりすることができる人がいますか」という質問に対して、「いる」と回答した人が73.5%と最も高いです。一方で、「いない」は13.8%、「相談や助けを求めたいと思わない」は6.8%でした。

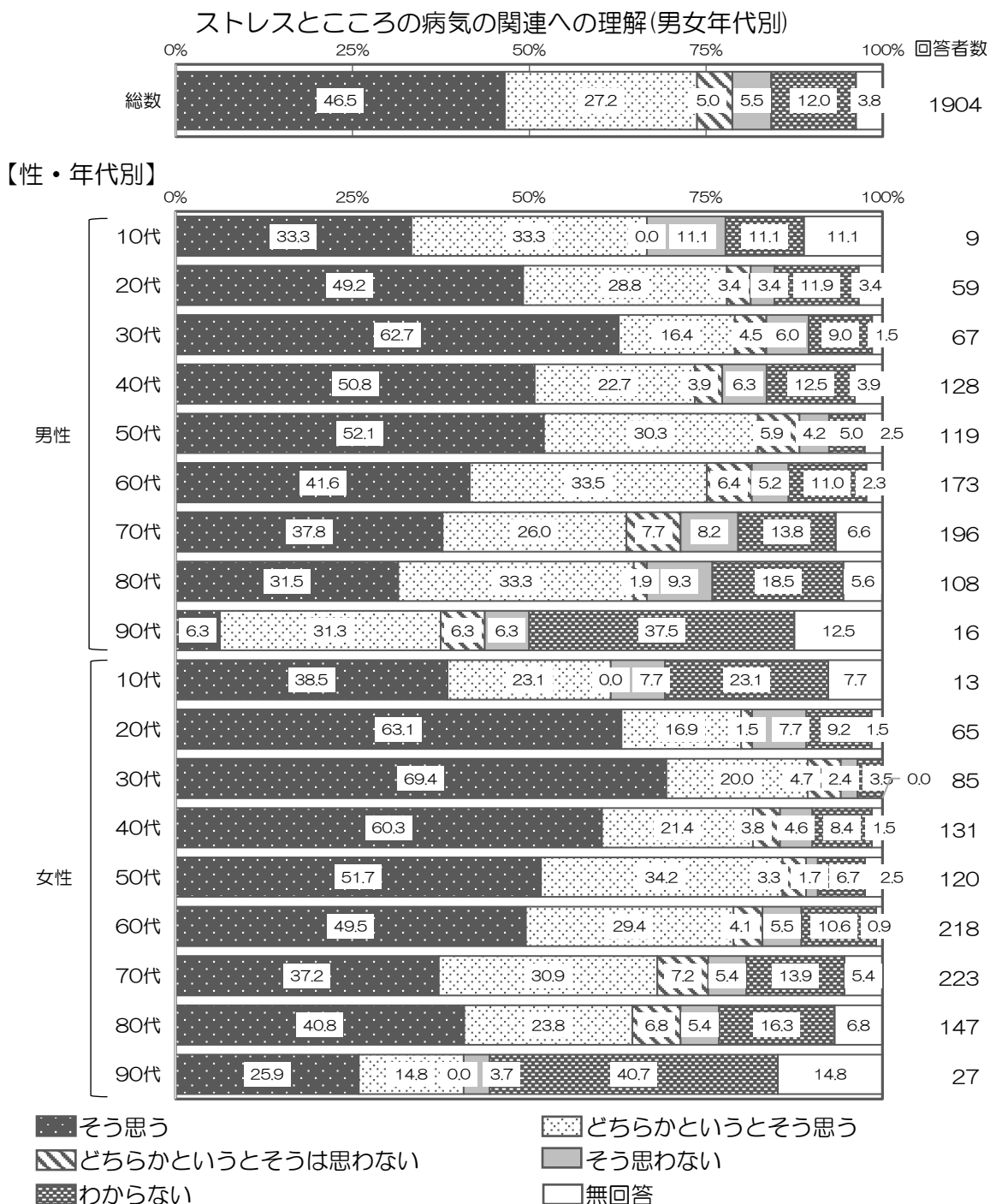
性・年代別にみると、特に男性の90代で約半数が「いない」「相談や助けを求めたいと思わない」と回答しています。また、どの年代においても、男性の方が「いない」「相談や助けを求めたいと思わない」と回答している割合が高いです。



④ 約7割が「ストレスとこころの病気の関連」について認識している

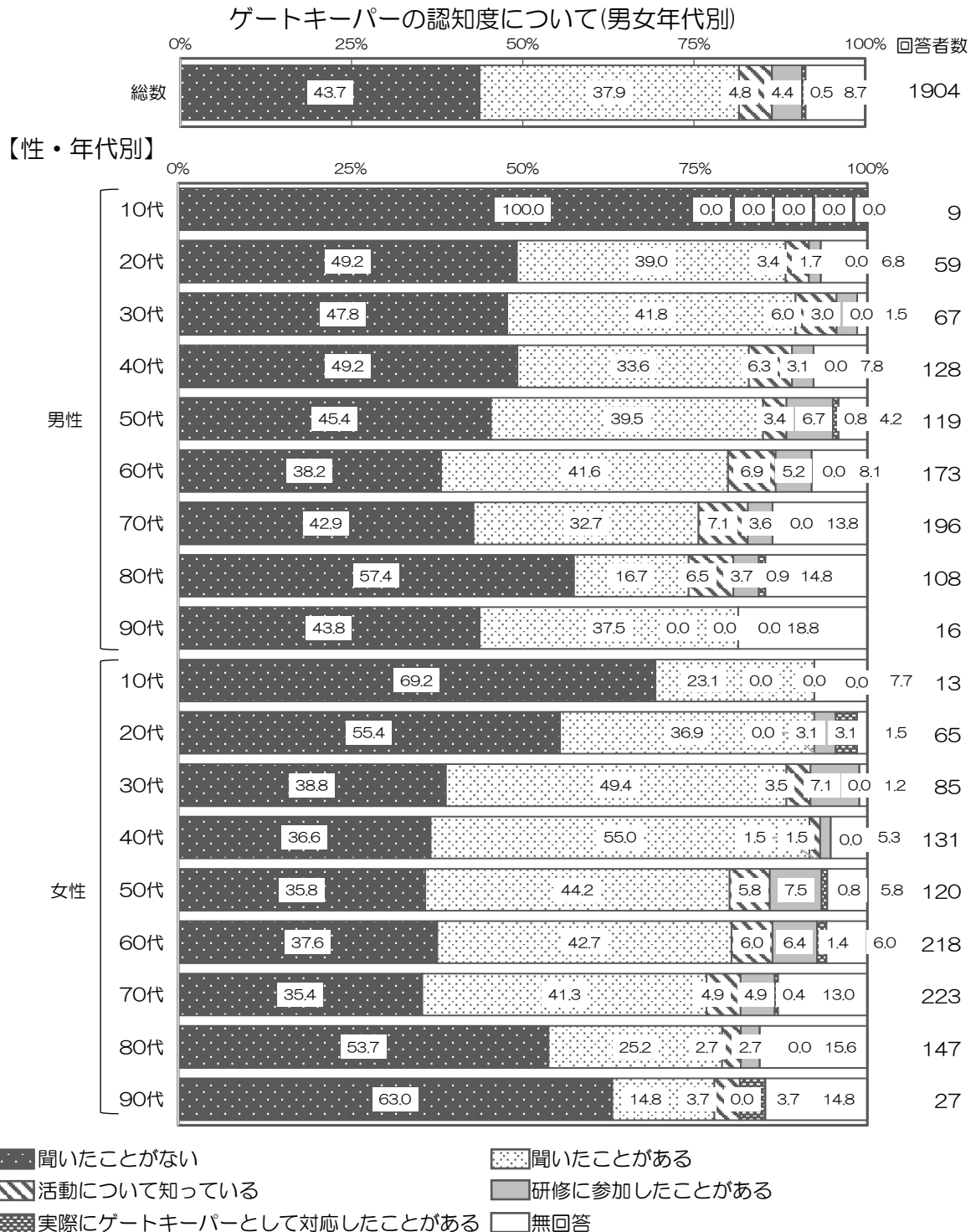
「ストレスが続くと、誰でもこころの病気になる可能性があると思いますか」という質問に対して、「そう思う」「どちらかというと思う」と回答した人が合わせて約70%で、ストレスとこころの病気の関連について認識していることがわかりました。

性・年代別にみると、男女ともに30代で「そう思う」と回答している割合が高いです。一方、年代が上がるとともに「そう思う」が下がる傾向にあります。



⑤ 「ゲートキーパー」の認知度は低い

「ゲートキーパー（悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る人）について知っていますか」の質問に対して、「活動について知っている」と回答した人は5%、「研修に参加したことがある」「実際にゲートキーパーとして対応したことがある」と回答した人は、それぞれ5%に満たない状況でした。また、関係機関への意見聴取においても、同様に認知度が低い状況でした。



「ゲートキーパー」とは

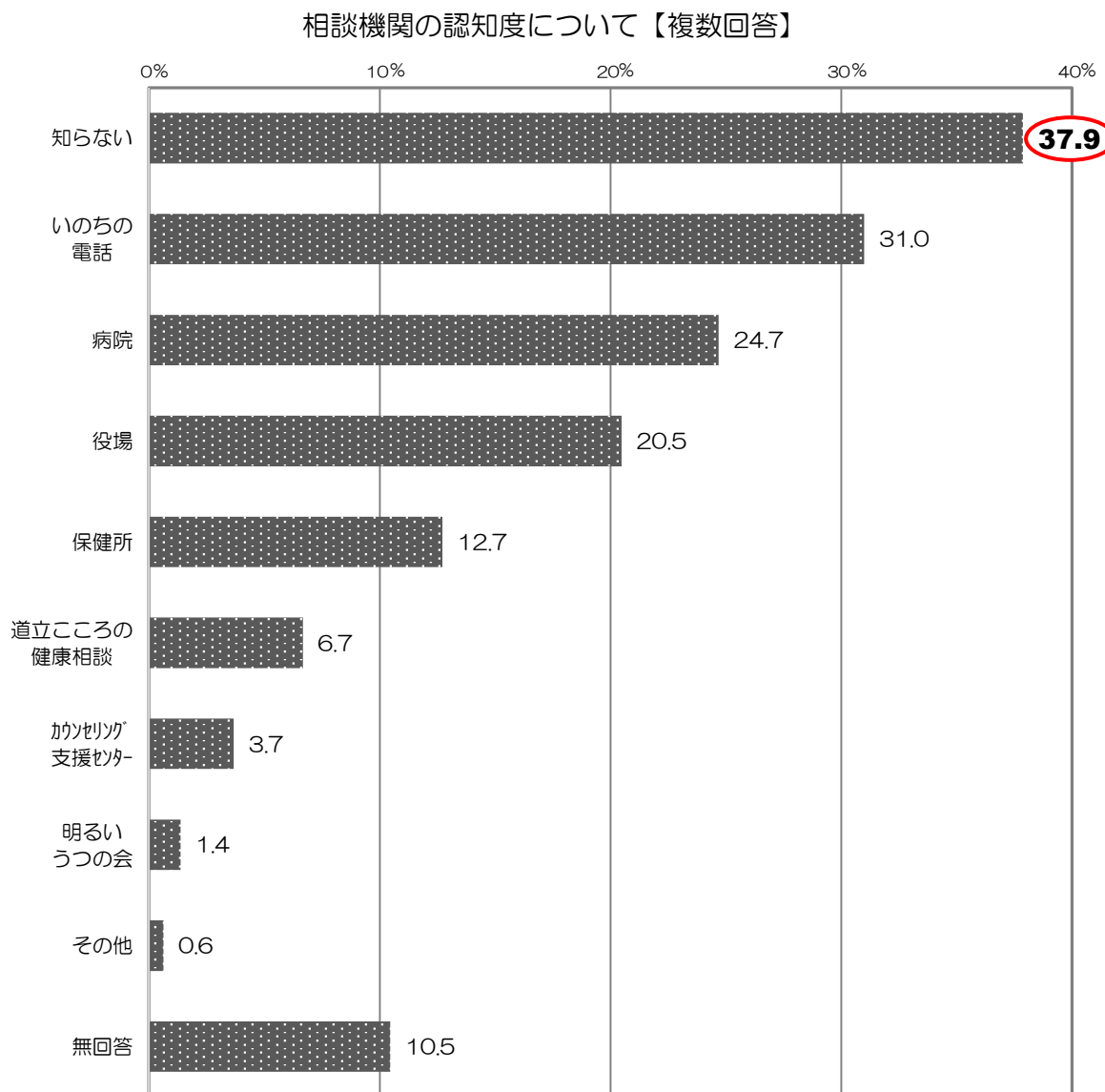
「ゲートキーパー」とは、自殺の危険を示すサインに気づき、適切な対応（悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る）を図ることができる人のことで、言わば「命の門番」とも位置付けられる人のことです。自殺対策では、悩んでいる人に寄り添い、関わりを通して「孤立・孤独」を防ぎ、支援することが重要です。1人でも多くの方に、ゲートキーパーとしての意識を持っていただき、専門性の有無にかかわらず、それぞれの立場でできることから進んで行動を起こしていくことが自殺対策につながります。

気づき	傾聴	つなぎ	見守り
家族や仲間の変化に気づいて、声をかける	本人の気持ちを尊重し、耳を傾ける	早めに専門家に相談するよう促す	温かく寄り添いながら、じっくり見守る

（資料：厚生労働省）

⑥ 約4割が「こころの健康に関する相談機関を知らない」

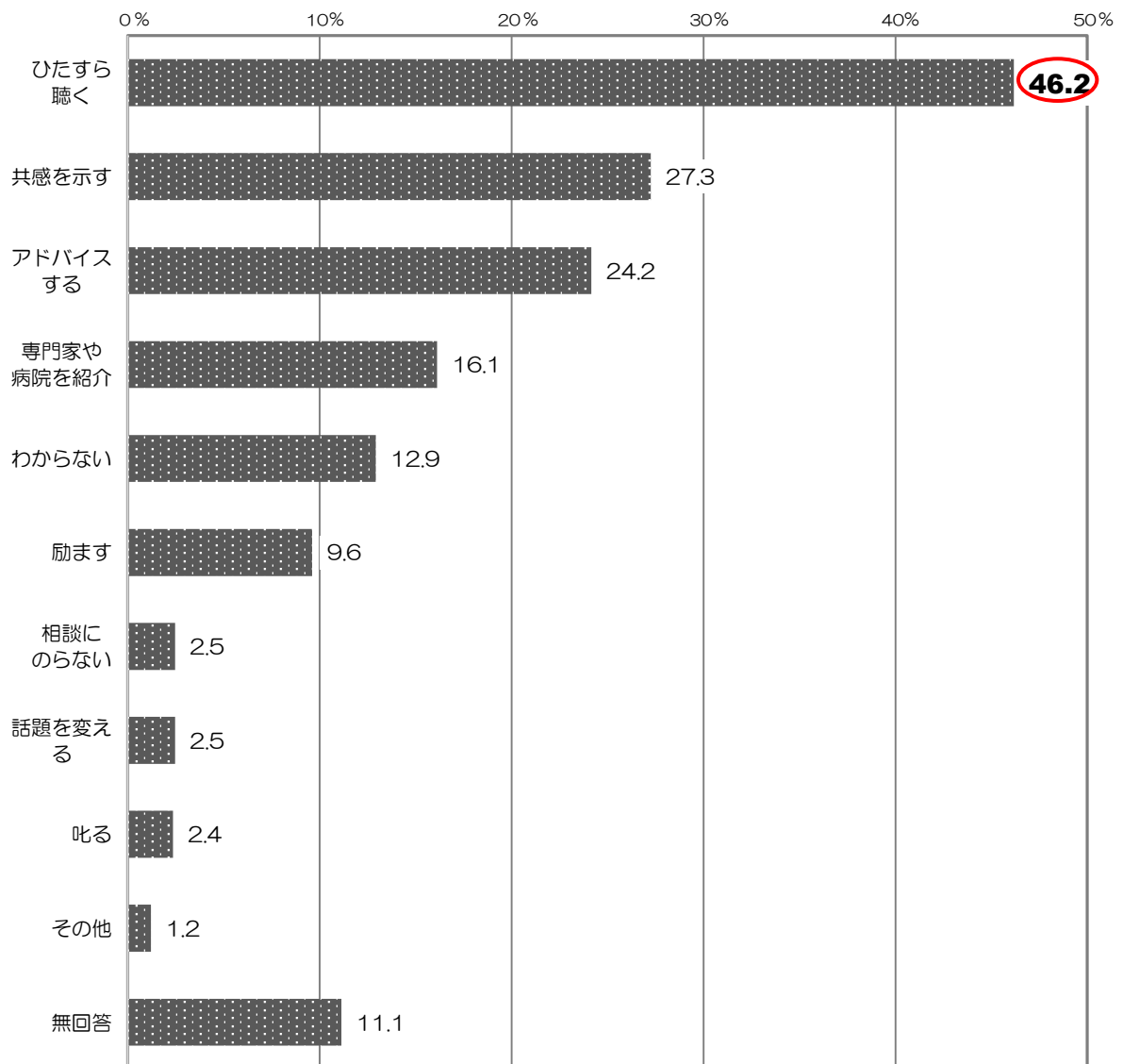
「こころの健康について、相談できる場所があることを知っていますか」の質問に対し、「知らない」の割合が37.9%と最も高く、次いで「いのちの電話」の割合が31.0%、「病院」の割合が24.7%となっています。一方、「役場」と回答した人は、20.5%でした。



⑦ 2人に1人が「傾聴」が良いと回答している

「もしも悩みや不安等について相談された時、どう対応するのが良いと思いますか」の質問に対し、「ひたすら耳を傾けて聴く」と回答した割合が46.2%と最も高く、およそ2人に1人にのぼりました。次いで「つらいんだね等と共感を示す」の割合が27.3%、「不安や悩み等に対してアドバイスする」の割合が24.2%でした。また、「専門家や病院等を紹介する」の割合は16.1%でした。

対応方法について【複数回答】



⑧ 約1割が気になる様子の人と関わったことがある。相談機関への「つなぎ」は少ない。

「気になる様子の人と関わったことがありますか」の質問に対し、「いなかった」と回答した割合が41.8%でした。また、「関わったことはないが気になる様子の人がいた」と回答した割合が13.2%となっています。

「相談にのったことがある」の割合が13.6%、「話かけるように意識してみた」の割合が11.1%となっており、実際に関わっていることがわかりました。

一方で、「関係機関に相談したことがある」の割合が2.1%、「関係機関に紹介しつなげたことがある」の割合が1.7%で、相談機関への「つなぎ」が低い状況にあります。

